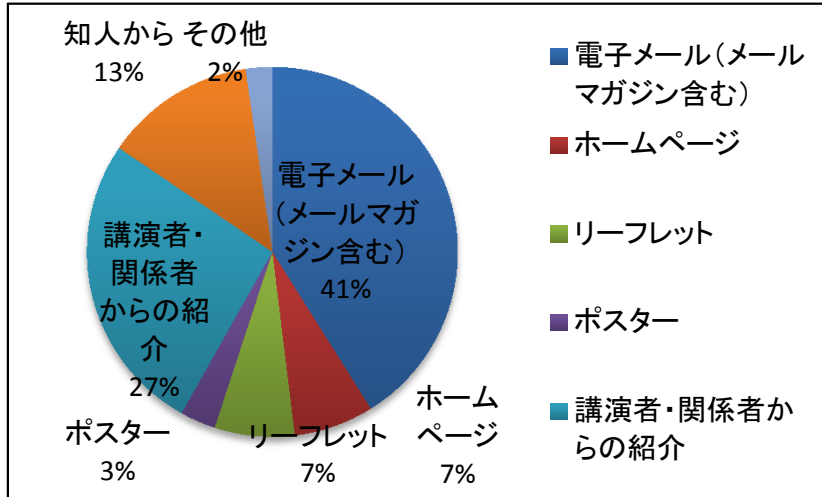
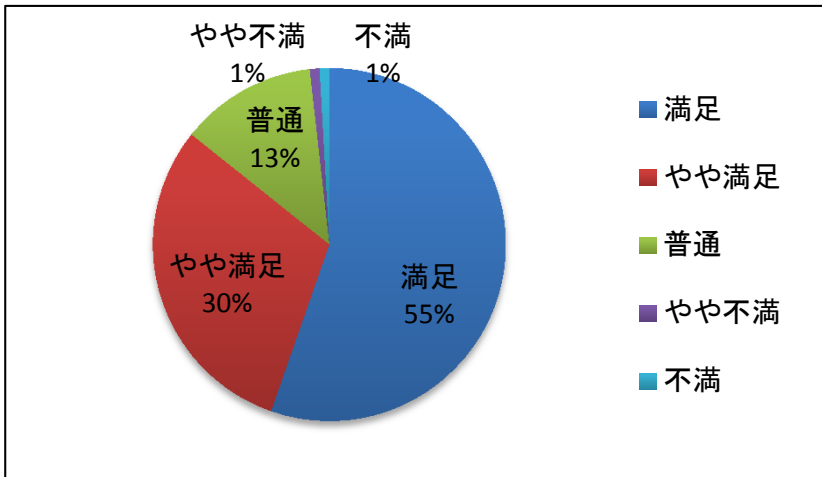


## 「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」第4回領域シンポジウム アンケート結果

### 1.本シンポジウムを何でお知りになりましたか



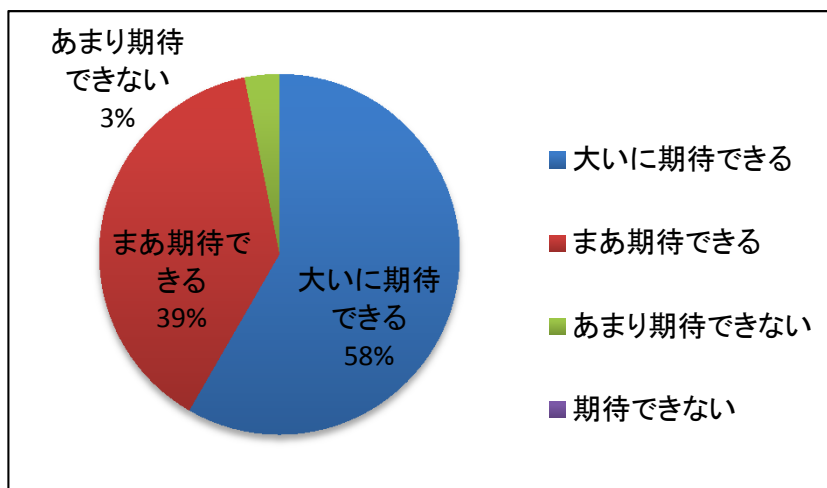
### 2-1.「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究開発領域について



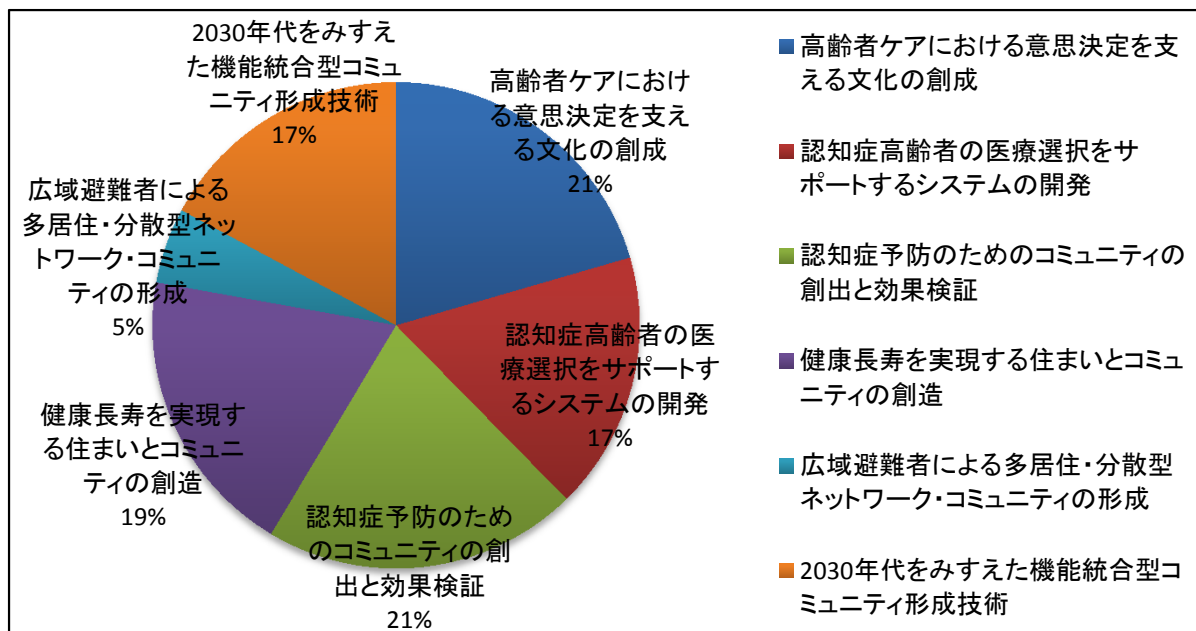
### 2-1.ご意見・ご感想

- ・初めて参加したので「コミュニティ」に着目した研究開発領域創設の意図について冒頭にもう少し説明があっても良い。
- ・導入なのでプロジェクトの全体を重点的にご説明いただき、各プロジェクトの内容はもう少しでも良いように感じた。
- ・各プロジェクトの成果を楽しもうかがえました。
- ・有効な活動だと思うが、今後の課題は的を射た新しい要素を取り入れることだと思う。例えば、1.官主導ではなく民主導にする、2.「楽しさ」への着目。その為には、①ジェロントロジーへの参加企業から意見をもらうことが、②個人・NPO主体の「楽しい活動」「新しい活動」を取り上げていくことが必要なのではないでしょうか。巻き込む力をどう強くするのかであると思います。
- ・日本人の大部分は、高度経済成長期の意識が残っており、再度成長期が来ると考えています。日本の中心や国といった立場にある方々がモデルを示すことは非常に重要と考えます。
- ・高齢化が世界の共通問題とわかりました。老人が少ないはずの途上国でも高齢化の兆しが見えると知り驚きました。
- ・持続可能な多世代共創社会のデザインと連携して良い成果をあげてほしい。また民間企業は参入・継続が難しい領域であり、意志と能力のある研究者の受皿になってほしい。

## 2-2.「平成24年度採択プロジェクト成果報告・ポスターセッション」について



## 関心を持たれたプロジェクト(複数回答可)



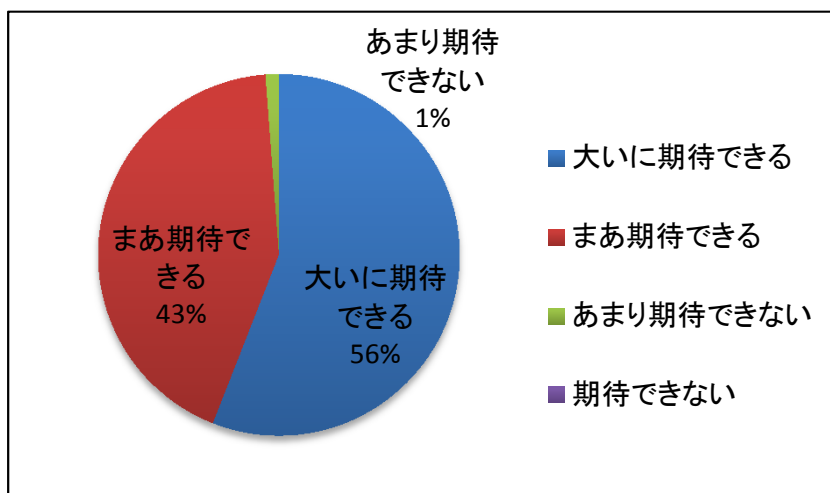
## 2-2.ご意見・ご要望等(各PJ)

- ・心積りノートの完成を期待しています。生と死の問題の施策は慎重に行わなければならない。(清水PJ)
- ・高齢者に対する一方的な支援ではなく、本人の能力低下に合わせて対応し、本人の人生を理解しようという立場から支援しようという立場、現実にはなかなか難しいことと思われるが、心積りノート、合意モデルなど具体的な内容にも興味を持てるものがあり参考になる。(清水PJ・成木PJ)
- ・認知症患者は自分が認知症という自覚がないため、コミュニティの活動をつくっても参加しようと思わないという問題があると思った。このような人々をどのように進行を防げるような活動に参加させるかどうか考えていく必要があると感じた。(島田PJ)
- ・認知症予防の効果検証の結果が分かったらもっと良かったです。(島田PJ)
- ・島田プロジェクトの効果の裏付けに期待。認知症ばかりでなく、ロコモティブ症にも有効ではないか。(島田PJ)
- ・断熱改修調査事例の結果はかなり大きな効果を示していることがわかるもので、住環境整備を考える事で有効な資料となり得る。知識の普及が望まれる。(伊香賀PJ)
- ・おげんき発信を能動的に住民が行っているのはいいネットワークが形成されていると感じた。(伊香賀PJ・佐藤PJ)
- ・橋原町の「おげんき通信」は素人考えですが高齢者に負担が大きすぎるように思います。普及が難しいのではもったいないです。(伊香賀PJ)
- ・「5年後、10年後のことを考えて」というと、「5年後、10年後は生きていないよ」と返答がある。人生90年、100年は耳では聞いていても自分の意識は60才、70才の人生となっている。意識改革のための働き掛けが大切に思います。(小川PJ)

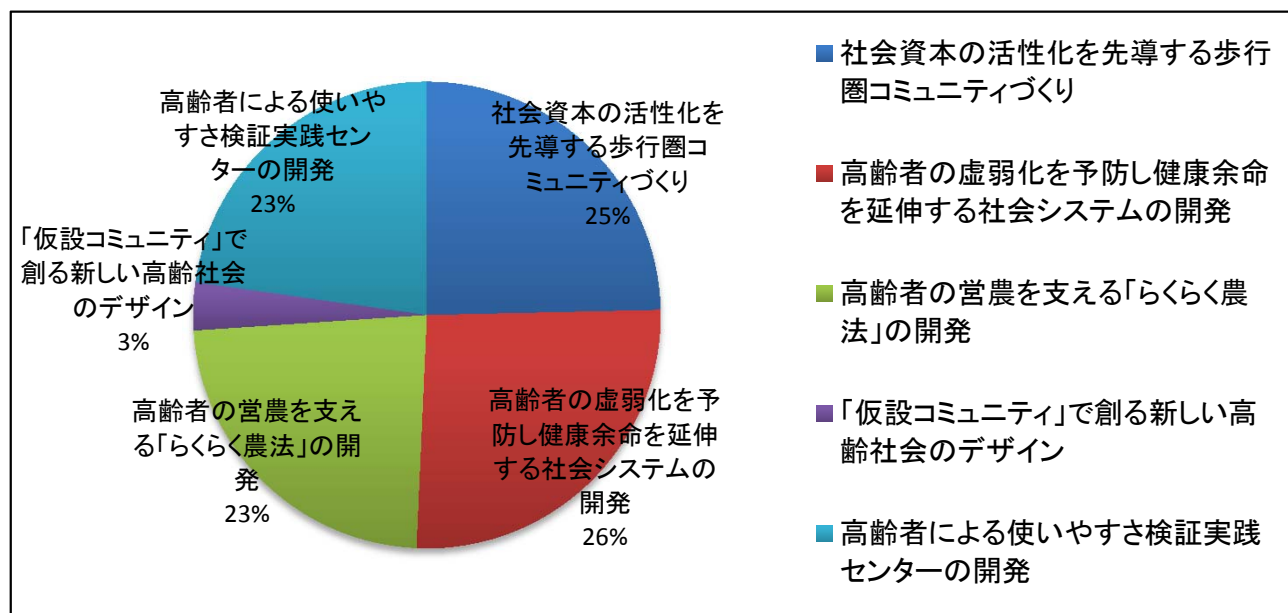
## 2-2.ご意見・ご要望等 (H24PJ全体)

- ・非常に興味深い発表でした。今後各PJがどのように継続されるのか、10年間程度フォローしてもらえると嬉しいと思う。
- ・いいプロジェクト結果が出たら広める必要があります。どんどんブラッシュアップして続けていくのが大変です。
- ・地域コミュニティの果たす役割は大きい。
- ・ポスターセッションの時間が短く残念です。参加者からの質問等いろいろお話が聞け、貴重な時間だった。
- ・各報告とも時間が短く、理解するのが難しいように思える。
- ・とても興味深い内容で今後の展開をぜひ知りたいと思いました。全てのプログラムに共通しますが、開発だけで終了せず、広く展開され活用されていくような取り組みを続けていただければと思います。
- ・若年層への情報発信を強化してください。「いかに生きるか」ともつながる問題として。

## 2-3.「平成23年度採択プロジェクト成果報告・意見交換」について (n = 84)



## 関心を持たれたプロジェクト(複数回答可)



### 2-3.ご意見・ご要望等(各PJ)

- ・このような研究開発も国の予算を使っているのだから、成果が広まるよう知恵をつかって広めることが重要。カートや農業運搬車が事業として成功するとすばらしい。(中林PJ・寺岡PJ)
- ・マニュアル作成というまとめ方も大切だが、富山市での歩行補助車を都市生活圏の中で位置づけるとか、農作業を助ける一輪電動車の開発などの企業を取り込んだプロジェクト、具体的な改善につながる過程がわかり易い。(中林PJ・寺岡PJ)
- ・まちなかカートの産官学民の取り組みは大変すばらしいと思いました。(中林PJ)
- ・住民のアイデアはまず実践！！は、できるようでなかなかできないすばらしい姿勢と思いました。地域の課題解決テーマを元に地元企業とともに歩行具づくりを実践したことはたいへんよい！！(中林PJ)
- ・男性高齢者が教室に出てくる仕組みが明らかになると良いです。(たまたま参加していたというだけでは、男性が参加しなくて困っている地域の参考になりません)
- ・「笑い元気お届け隊」のシルバー人材センターをサポートとする取り組みはコロンブスの卵と思いました。(新開PJ)
- ・養父市の例が良くまとまっている。(シルバーによる虚弱予防)(新開PJ)
- ・プロジェクト終了後も環境政策課が歩行補助器具のメンテナンス、運用を引き受ける仕組みを作った点。取り組みの持続性、行政に与えられたインパクトという点で高く評価できる。(中林PJ)
- ・奈良県の“ごんたもち”実演販売していただき良かったです。(寺岡PJ)
- ・「らくらく農法」の電動工具(一輪車等)のユニークな発明が素晴らしい。(寺岡PJ)
- ・「らくらく体操」による多数の発表関係者の方々による舞台上の模範演技、また会場全体を起立させ、一緒に巻き込んでのリーダーシップのとり方が大変素晴らしかった。(寺岡PJ)
- ・らくらく農法機器開発の話社長からお聞きして、この活動の意義を感じた。(マーケットインによる商品開発の実践)(寺岡PJ)
- ・「仮設コミュニティ」の発表で質問者の方の言っていた「自然に生まれるコミュニティ」について考えるべきだと感じた。(大方PJ)
- ・仮設コミュニティは、結局ノウハウとして何が残ったのか不鮮明でした。(大方PJ)
- ・みんラボは全国各地への展開をどんどん図っていただきたい。高齢者(特に男性が参画しやすく、企業としてもわかりやすい商品開発のしくみ)(原田PJ)
- ・高齢者を研究対象とすることは多いと思いますが、パートナーとして積極的に参加を得たことは興味深かった。(原田PJ)
- ・みんラボは、不定期ですが見学に行っています。長く続けてもらいたいと思います。(原田PJ)
- ・消費生活アドバイザーとして原田PJのニュースに同感していたので、ご本人のお話が伺えてうれしかったです。(原田PJ)
- ・身近なものの使いやすさについて焦点を当ててとても興味深かった。高齢者が使いにくいものは誰でも使いにくいということが当たり前だが目からウロコだった。(原田PJ)
- ・みんラボ、是非活動に参加したいと思います。(原田PJ)

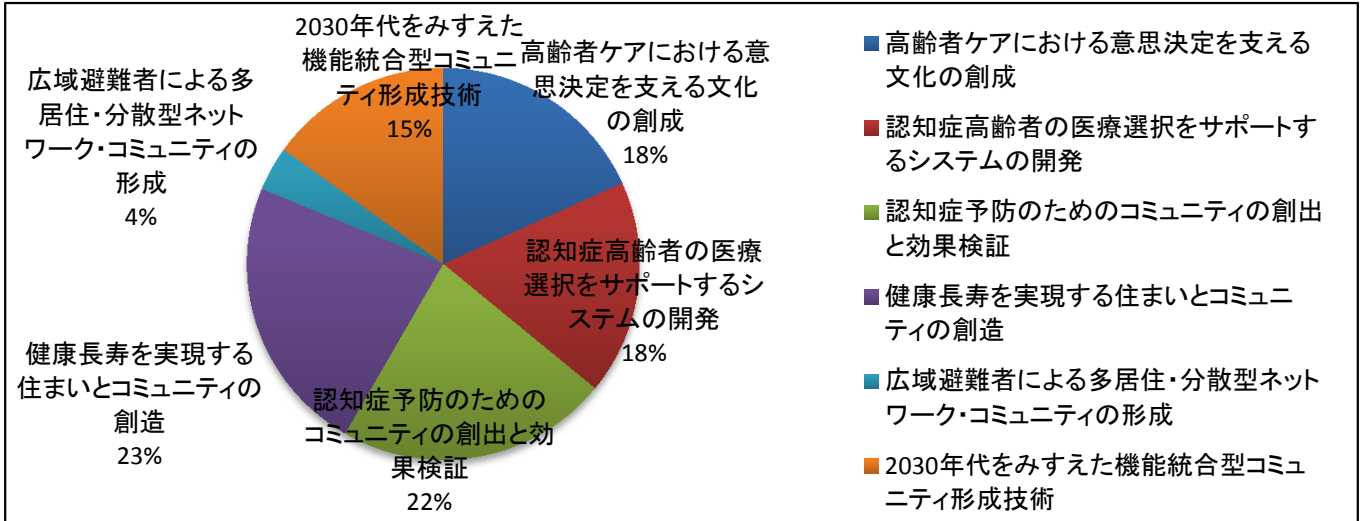
### 2-3.ご意見・ご要望等(H23PJ全体)

- ・社会実装がプロジェクト活動の定常運用の話にとどまっていたりして社会への広がりを期待出来なかった。
- ・プロジェクトとして扱えるような“コミュニティ”と社会生活は切りはなして議論すべきだと感じた。
- ・「地域振興プロジェクト」にしか感じられなかった。
- ・継続するメカニズムの実現研究をお願いしたい。
- ・研究の終わりが金の切れ目→継続するサービス化の研究を行わないと、社会へつながらないのではないのでしょうか。
- ・実践的で面白かった。
- ・顕著な成果が出ている。是非成果の普及にも努めていただきたい。
- ・若い参加者が多く、今後の高齢社会の改善に期待がもてると思った。
- ・住んでいる人がやる気にならないと効果は期待できません。内容はもちろんですが広める人の人柄、リーダーの人柄、人間性が大切かと思えます。
- ・地域で支えるシステム創りを提案願いたい。

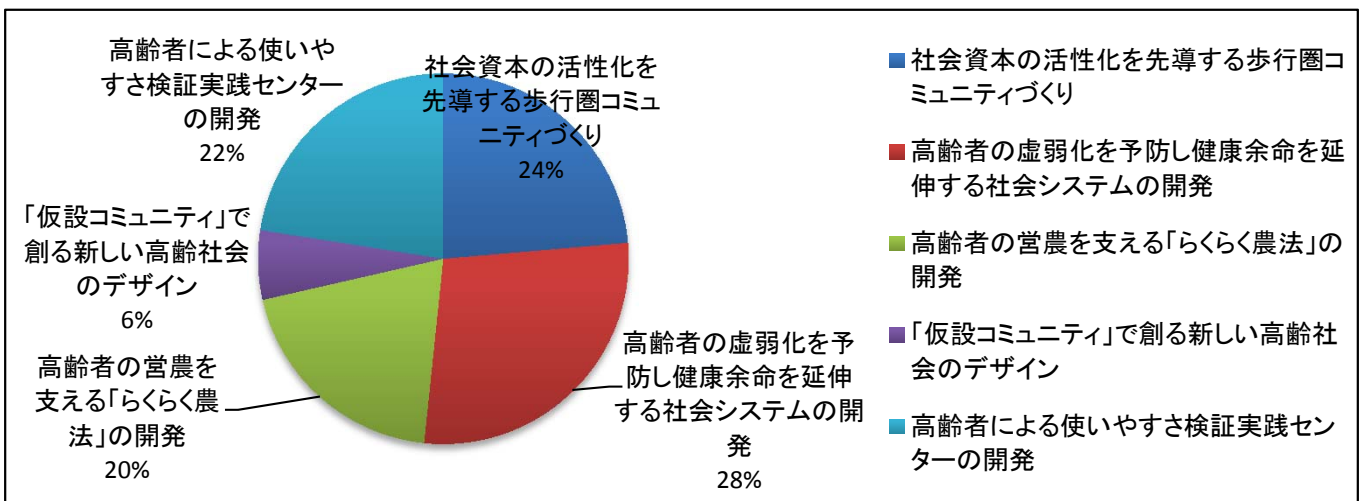
## 2-4.全プロジェクトについて

参考になったプロジェクト(複数回答可)

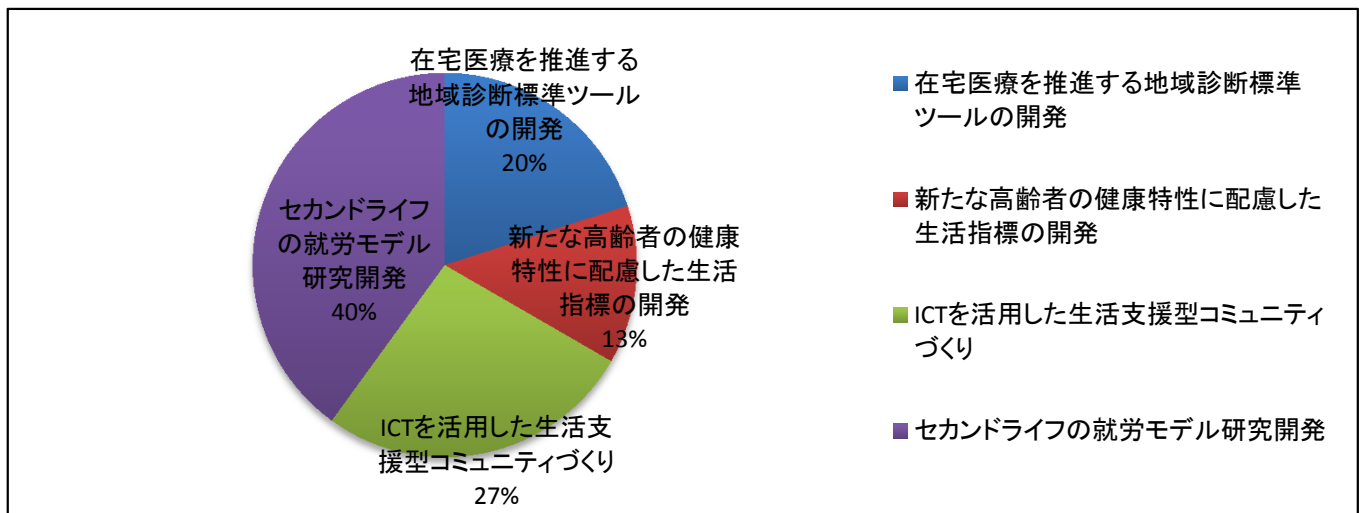
### 平成24年度採択



### 平成23年度採択



### 平成22年度採択

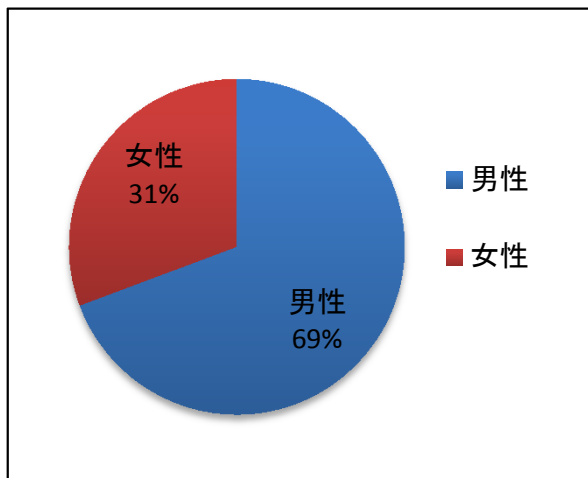


## ■シンポジウム全体について自由なご感想をお聞かせください

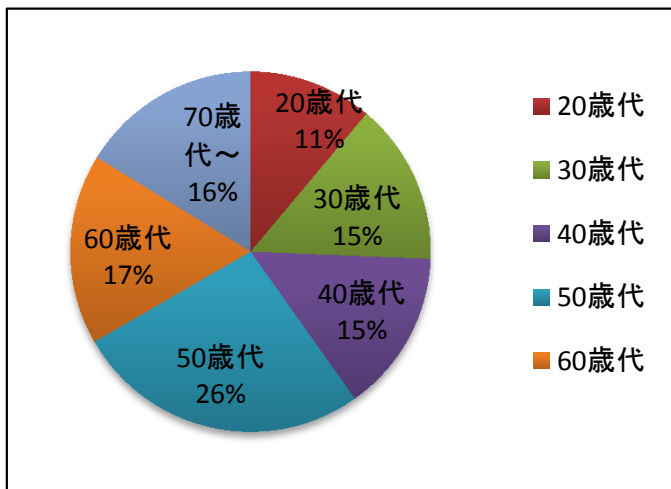
- ・同じ目的・対象者のプロジェクトが多くある。それらをまとめて取り組んでもらえれば、良いものがより早く現実なものになる
- ・「高齢社会のデザイン」という題名にひかれて通い続けました。いろいろな地域で住民の熱意とかかわっている学識者等のつながりが大きな一歩となっていると感じました。
- ・研究者がハブとなってすばらしい取り組み、成果を上げているが、このような取り組みがジェネラルになるにはどうしたら良いか？という方策も必要なのではないかと思いました。(これからだとは思いますが)
- ・被災地自治会長のお話が非常に参考になった。はじめて現場の声を聞いた。対象地の住民の方々のお話を聞ける機会がほしい。
- ・高齢者が高齢者と一緒になんとかしようとするものばかりで少し採択がワンパターンな気がします。もう少し子どもや現役世代とのつながりなどの視点があればよかったと思います。
- ・多くの活動が他の地区でも参考になる具体的な成果があり、またマニュアルやガイドラインなどのoutputがあり、すばらしいです。
- ・モデル地域の皆さんは各地に出向き講演など話しをして下さい。(国も県も取り込んで下さい)
- ・会場との質疑応答にすれ違いを感じた。会場にいる一般の高齢者と発表者とのギャップをうめる努力の必要性を感じました。
- ・シンポジウムを通じて、高齢社会の地方コミュニティづくりに関して、全国の各地で色々工夫され成果をあげているいくつかの実例(プロジェクト)を知ることができ、身近な地域社会の将来に漠然とした不安を感じている高齢者の一人として、大変嬉しさや頼もしさを感じました。
- ・かねて関心を寄せていたプロジェクトの発表が多く刺激的でした。共同研究ができないか、或いは直ぐ実践に取り入れたいと思うプロジェクトも多かった。アクションリサーチならではの自在性も感じた。確立された手法として整理・提示されることを望んでいます。
- ・「人」あつての「まちづくり」で「人」は「情報」を得、共有してこそ動きはじめる。その「人」の背中をポンとたたいて前向きに歩きはじめるようにして下さるのが、このようなシンポジウムだと思います。もっと多くの方々に参加していただきたいシンポジウムでした。
- ・本日はそれぞれのプロジェクトの推進プロセスがたいへん役に立ちました。今後の企業の新商品、サービス、ビジネスはやはり地域環境を変える活動に入り込み、そこからそのヒントを得ることが、真のニーズに対応できるものづくり、サービスづくりにつながると感じました。社内ではまだその成果、やり方の良さを実感できる人がたいへん少ないと思います。今後のアクションリサーチの普及、展開に期待します。
- ・各プロジェクト、熱意を持って各種の人間を巻き込んで行われ、結果良い成果がでている。前向きな方向性が示されて良かったと思いました。コミュニティをデザインしながら必要な道具の開発を地元で行っているところがすばらしいと思いました。
- ・実際に現地で活動した方から直接お話が聞ける、しかも多くのエッセンスをまとめて聞ける機会として貴重な時間でした。途中で体操を入れるなど会の進行も良かった。
- ・全体を通じ課題解決を行う主役は、自治会、町内会が担うものと思料します。いかにこれら団体を活性化させることが重要となるでしょう。
- ・成果発表の場と思って来たが、各PJの成果というより取り組み紹介に終止しており、どんな取り組みがどんな成果をもたらしたのか、全くわからなかった。
- ・大変素晴らしいプロジェクトが満載ですので、もっと広く多くの人と情報を共有されることをお願いしたいと思います。(ネットでの公開など)また、海外への発信もぜひともご検討くださればと思います。
- ・各発表でもう少しデータにもとづいた発表をしてほしい。どんな方法でどのくらいの効果があったのかについて量的な分析の紹介は研究発表であれば必須ではないか。客観的な(ある程度)データのない成果を「各地に広げて行く」と言われても説得力がない。
- ・自分達の町へさっそくもってくるのに、今どこに相談しようか、だれを取り込もうか、自分の団体ですぐやれることは何なのか、考えているところです。60代・70代の元気な人のやりがいと達成感を味わうため、やっていきたいと思いました。
- ・もっとくわしく内容を知り、意見交換したかった。時間が足りないなと思いました。今後論文などで知りたいと思いました。
- ・死の再定義を国民レベルで検討しないと日本はもたない。現場の実装が大切。また、知見を積み上げよう。
- ・高齢社会は高齢者自身が自覚を持って社会に役立つ活動を進めることが大切。高齢という名目で、守られる人ではなく、支える人として活動することを実感しています。
- ・行政は3月のこの時期は、年度末で多忙な時期です。2月や8月、9月の開催も考えて下さい。市町村の担当者は「計画書」の作成、見直しで業務の80~90%エネルギーを使っています。3年で異動です。課題解決に向けた取り組みが目的なのに、具体的な取り組みがされていません。市町村職員は現場に最も近い所において、共に取り組むことが義務だと思います。
- ・研究・コーディネーション・実装の連携が実現できている。知行合一の理想形に近い。
- ・地域に根ざした住民と一緒にコミュニティをつくって、またはコミュニティに入り込んで行う実地研究の事例をたくさん伺って大変興味深かった。企業の研究所にいと直接こういう手段で研究しにくいけど何らかの形で係わりたいと思う。

3.差し支えない範囲でお答え下さい

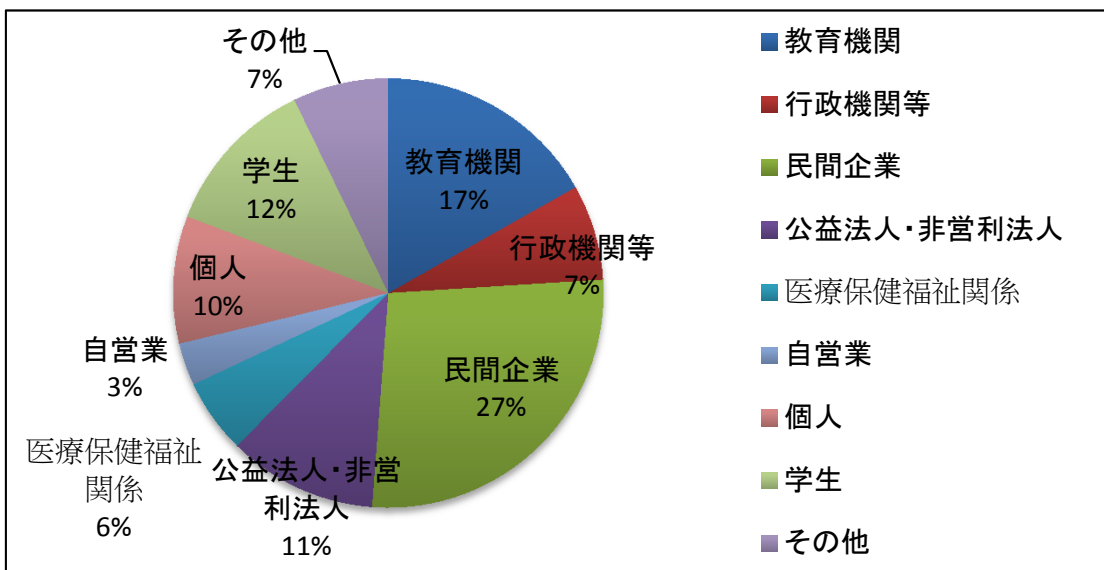
性別



年齢



ご職業



ご所属

